ISSN　0915－6925

大学アーカイヴズ

全国大学史資料協議会東日本部会会報

2021.10.31　No.65

Japan Association of College and University Archives ： Eastern Japan Division

目　　次

・岩本　智実「第122回東日本部会研究会 参加記」…… 1
・石井奈穂美「東日本部会2021年度総会記念講演を拝聴して」…… 3
・内藤　清志「第123回研究会に参加して」 …… 6
・全国大学史資料協議会東日本部会2021年度総会議事録 …… 7
・全国大学史資料協議会東日本部会幹事会議事録 ……12
・全国大学史資料協議会東日本部会研究会記録 ……15

2021年3月11日（木）第122回東日本部会研究会（於：凸版印刷「印刷博物館」／オンライン）

第122回東日本部会研究会 参加記

青山学院資料センター　岩本　智実

第 122 回全国大学史資料協議会東日本部会研究会は、2021 年 3 月 11 日（木）、凸版印刷の印刷博物館研修室において、「企業における史資料アーカイブの取り組み（発掘・共有・公開など）の現状について」をテーマに、凸版印刷の 3 名の演者による事例報告と開館 20 周年記念でリニューアルされた印刷博物館の見学という内容で行われた。また、今回の研究会は Zoom を使用したオンライン参加型と、会場参集型のハイブリッド方式という新しい試みを取り入れて開催された。

第 1 報告は、古文書解読とくずし字資料の利活用サービスである「くずし字 OCR とふみのはゼミ」について、凸版印刷の福井尚子氏よりご説明いただいた。くずし字 AI-OCR の認識精度の高さは、膨大な量の字形データベースを蓄積してきた印刷会社の成せる業だと感じた。今後も、判読できなかった字形を AI に繰り返し再学習させることにより、認識精度の向上が可能であるとのこと。さらに、解読結果を利用した「ふみのはビューア」や「ふみのはタッチ」というシステムの導入による新たな展示方法や、ASP として提供される「ふみのはゼミ」を利用した、大学での授業や年史の編纂事業など、活用の場は多岐にわたるであろう。しかし、字形には表れない年代・地域・文脈・書き手の心情などの情報も考慮し、総合的に判断したうえで解読することは難し

いため、まだまだ人間の能力を超えられない部分もあるとのことであった。

第２報告は、クラウド型ファイル管理・共有サービス「IMAGE WORKS」を活用した資料の整理と共有について、凸版印刷の立木玲央氏より解説していただいた。「IMAGE WORKS」はデジタルアセットマネジメントという概念をもとに設計された富士フィルムのファイル管理・共有サービスであり、あらゆるコンテンツやドキュメントにおける活用が可能で、大容量、高速転送、グローバル対応

といった機能を有しているとのこと。特に「ダウンロード申請・承認」と「文書内検索」の機能については、デジタルアーカイブの管理運営上、非常に有効な機能だと感じた。コロナ禍におけるテレワークの普及や業務のデジタル化の中で、安全面を担保しながら、今後も更なる機能の進化が期待されるサービスであると感じた。

最後に第３報告として、「印刷博物館の設立とリニューアル」と題して、開館 20 周年を迎えた印刷博物館について、その設立の経緯などを副館長の宗村泉氏よりご紹介いただいた。印刷博物館は、2000 年に創立 100 周年記念事業として、会社のブランドイメージを文化面から高めるとともに、「印刷とはなにか」といったことを追究する「印刷文化学」の構築を目指し開館した。しかし、開館 10 周年の時点でその定義や具体的な活動方針の構築に至らず、再度、印刷博物館の存続と発展向上のために「印刷文化学」の構築を目指し、2020 年のリニューアルに向けて学芸員中心のプロジェクトを立ち上げ、昨年 10 月の開館に至ったとのこと。2000 年の開館当初より、販促活動重視のショールーム的な施設ではなく、「印刷文化学」の構築を目指した「文化施設」としての位置付けを選択し、それを継続されていることに、経営層をはじめとし開館に携わった責任者の方々の強い意志を感じた。また、設立にあたっては、知識や資格を持っていることよりも、その館が発信するコンテンツが「好き」であることがポイントであり、オタク的な担当者の存在も重要であるといったことや、館を運営していくためには、２～３年で旧式になってしまうデジタル機器に頼らない、アナログによる表示や仕掛けも重要であるなど、興味深い体験談もお聞かせいただいた。

報告後の質疑応答では、経営層の理解を得るためにどのような活動をされたかとの質問があり、時代の話題性や会社（博物館）としてのバリューを高められることを説いたり、他にはない独自性の強い企画の立案や、海外からの著名人を来賓として招待したことなどがあげられた。今後、各大学で博物館、資料館などの開設またはリニューアルを検討する際にも参考になるのではと感じた。

報告会終了後、２班に分かれてリニューアルした印刷博物館の見学を行った。約 2,000 ㎡の展示スペースは圧巻で、体験参加型の印

刷工房も併設されており、映像解説やグラフィックを多用した展示など、企業系ミュージアムの「財力」を見せつけられたような気がした。と同時に、日本と世界の印刷の歴史や、印刷技術も理解できるような展示となっており、まさしく「印刷文化学」を追究した「文化施設」としての役割を果たしていると感じた。懐かしいポスターや商品パッケージの数々も展示されていたが、個人的には、世界最古の印刷物とされている「百万塔陀羅尼」を見ることができ、非常に感動した。

余談ではあるが、印刷博物館のロゴマークは「見」という字の象形文字をモチーフとしているとのこと。印刷物や文字に接するとき、まず「見る」という行為により始まることからロゴマークに採用されたとのことであった。

2021年5月27日（木）全国大学史資料協議会東日本部会 2021年度総会（オンライン開催）

東日本部会2021年度総会記念講演を拝聴して

日本獣医生命科学大学付属ワイルドライフ・ミュージアム　石井奈穂美

2021 年 5 月 27 日、全国大学史資料協議会東日本部会 2021 年度総会・講演会が開催された。当初は法政大学市ヶ谷キャンパスにて開催される予定であったが、新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴う緊急事態宣言の延長により、対面形式での開催は見送られ、Zoom を活用したオンラインでの開催となった。

当日は会場校であった法政大学のお二方にご講演をいただいた。以下にご講演の内容をまとめ、最後に当館の事例と比較しつつ感想を述べたい。

古俣達郎氏からは、「法政大学における大学史編纂の歩みと HOSEI ミュージアムの開設について」と題して、2020 年に開設された HOSEI ミュージアムの過去・現在・未来についてご講演をいただいた。法政大学における大学史の編纂は、戦前の周年事業から始まっている。1907 年に法政大学法学部の機関誌である『法學志林』の第 100 号に『法政大學の過去及現在』（石原三郎著）が掲載

されたのち、1909 年に法政大学史としては最初の出版物となる『法政大學参拾年史』が発行され、そのほかにも複数の資料で大学の歴史がまとめられた。

戦後、1961 年になると『法政大学八十年

史』が刊行される。これは、法政大学初の本格的な通史として実証主義に基づいて作成されたものである。戦前の年史では、学校の創立を 1879 年としていたが、資料調査により「東京法学社開校ノ趣旨」が発見され、1880 年に改められた。このころから、大学史資料室の設置が構想されるようになるが、当時は実現しなかった。

周年事業から恒常的な編纂体制への移行は、100 周年事業がきっかけとなっている。100 周年事業の一環として、1978 年から『法政大学史資料集』の刊行が始まり、1980 年には『法政大学百年史』が刊行される。この時の編纂委員会が母体となり、大学史編纂室が設置されることになった。

このような流れで設置された大学史編纂室であるが、2008 年から 2009 年にかけて、「法政ミュージアム」の設置に伴う廃止が検討されていた。最終的には、大学史編纂室の体制を変更し事業内容に展示公開を追加することで編纂室の廃止が免れ、2020 年には「HOSEI ミュージアム」として大学史の展示が始まった。

今後の活動と課題の一つとして、法政大学創立 150 周年に向けた事業が挙げられた。2030 年に創立 150 周年を迎える法政大学は、2019 年からオーラル・ヒストリーを開始し、資料調査を進めているが、コロナ禍で中断を余儀なくされている。また、大学史の編纂を担う部署が展示活動を同時進行で行うことによる業務上の負担も課題として挙げられた。

北口由望氏からは、「HOSEI ミュージアムの取り組み」と題して、同館の「大学史サイネージ」についてご講演いただいた。

「大学史サイネージ」とは、HOSEI ミュー

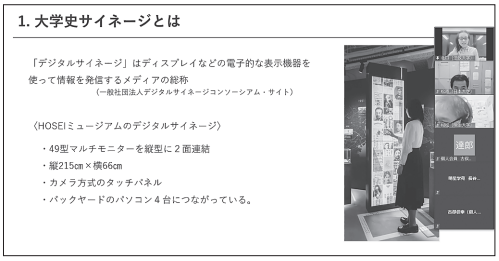
ジアムの大学史ゾーンに設置された 4 台のデジタルサイネージのことを指す。大学史ゾーンでは、法政大学の成り立ちを 4 つの時代（若者たちによる建学、進取の気象、自由と進歩を追い求めて、たゆまぬ変革の明日へ）に分けて示しており、各時代の展示内容にデジタルサイネージ 1 台が対応している。デジタルサイネージはカメラ方式のタッチパネルとなっているため、来館者はデジタルサイネージに触れることで、各時期の歴史や人物について、詳細な情報にアクセスすることができる。

ミュージアムについて検討が始まった当初から、デジタル技術の活用が検討されていた。当初は「法政大学ミュージアム」と仮称され、箱物としてのミュージアムではなく、ICT 技術を活用したデジタル空間でのミュージアムが構想されていた。議論の結果、デジタル空間のみではなく、実際に展示場所が設けられることとなり、2017 年 12 月に理事会でミュージアムの設置が承認された。

展示室のレイアウトや展示内容については、人物（フロントランナー）を軸に法政大学の過去・現在・未来を表現することを基盤として検討が進められたが、デジタルサイネージが採用された背景には、ミュージアムの規模の影響が大きい。HOSEI ミュージアムは、既存の校舎ビルの 1 階を改築して作

られており、展示室の面積は 100 ㎡ほどである。小規模な展示室であっても、デジタルサイネージであれば来館者の動線を確保しつつ多くの情報を提示することができ、来館者がそれを能動的に閲覧することが可能となる。最終的に、大学史展示はデジタルサイネージをメインにコンパクトな実物展示を併用した融合案が採用された。

デジタルサイネージに表示されるコンテンツは、法政大学の学風を形作った人物の群像を通じて法政の歴史を表現し、さらに法政の歴史を通じて時代を知ることを意図している。各コンテンツは単純に年代順に並べられるのではなく、人物を中心に様々なトピックがリンクする形で表示されるため、来館者は直感的に興味の赴くままに情報に触れることができる。なお、年代順に閲覧したい来館者にも対応するため、コンテンツの一覧表示も可能となっている。



最後に現状の課題として、web 上で公開されているデジタルアーカイブとの連携が挙げられた。構想の時点では、デジタルアーカイブとデジタルサイネージをリンクさせることが予定されていたが、セキュリティの問題により、現時点ではデジタルサイネージを web に接続することはできていない。また、デジタル機器に抵抗のある来館者への対応も課題の一つとして挙げられた。

筆者は、日本獣医生命科学大学の付属博物館であるワイルドライフ・ミュージアムに所属している。当館は本学で学芸員課程を学ぶ学生の実習施設の需要から 2015 年に設置された博物館であり、開館当初は主に自然史資料の収集・展示を行っていた。その後、大学史資料の収集・保管も当館が担うようになり、2017 年からは大学史に関する展示も実施している。大学史の編纂室を持たず博物館がその役割を担う当館は、大学史の編纂室が展示業務を担う法政大学とは逆の立場ではあるが、大学史資料の収集管理業務と展示業務のバランスが難しく、業務上の負担が生じていることは共通であると感じた。一方で、今回のご講演を拝聴し、魅力的な展示の実現には日々の歴史編纂業務が重要であることも痛感した。デジタルサイネージ 4 台には 5 万字を超える情報が詰め込まれており、それぞれの情報が人物を中心に丁寧に紐付けられている。人と人、人と物、人と出来事のつながりから法政大学の歴史を表現するという展示構成は、日々の歴史編纂業務の蓄積が有るからこそ可能であると感じた。

当日はオンラインでの開催となったため、実際にミュージアムを見学することは叶わなかったが、事前にミュージアムの様子を撮影した紹介動画を公開していただいた。来館者の興味の赴くままになめらかに表示を変えるデジタルサイネージの様子に、自分も触ってみたいと心を惹かれた。コロナ禍が落ち着いた暁には、ミュージアムを訪ね法政大学の歴史に触れたいと思う。

2021年7月16日（金）第123回東日本部会研究会（於：千葉大学／オンライン）

第123回研究会に参加して

玉川大学教育博物館　内藤　清志

2021（令和３）年７月16日、全国大学史資料協議会東日本部会第123回研究会が千葉大学とオンラインのハイブリッド形式で開催された。本研究会のテーマは「情報の構造化によるデータベースの検索利便性の向上」で、千葉大学　人文社会科学系教育研究機構　小風助教による講演の後、質疑応答が行われた。

小風氏は７月26日に発売となる「欧米圏デジタル・ヒューマニティーズの基礎知識」を著しており、また、渋沢栄一記念財団との共同研究事業「渋沢ダイアリー」の開発を行った研究者である。本講演は前述の研究成果、著書の内容から、データベース上の情報の構造化による検索利便性をいかに上げるか、という昨今のデジタルアーカイヴズにおける検索に関する問題点の解決につながる内容である。

まず、デジタル・ヒューマニティーズ、TEI（Text Encoding Initiative）等の説明があった。デジタル・ヒューマニティーズはデジタル人文学、人文情報学とも訳され、人文科学における情報化に関する研究、調査、教育および考案である。技術的にはTEIと呼ばれる人文学資料をデジタル化するための国際的な共同プロジェクトのガイドラインに準拠し、XMLを技術基盤とするため、特定のハードウェアやソフトウェアに依存せず効率的、効果的に情報の共有を行うことが可能であることについて、歴史的背景も含めての説明がなされた。

続いて、デジタル史資料の活用について、画像データ、テキストデータ、タグ付きデータ各段階の活用難易度の説明があり、デジタル史資料を活用しやすくするためには、テキストデータの構造化（タグ付け）が有効であるとのこと。構造化テキストについて、国内外の事例から「人名」を例に属性ごとの情報を整理・提示することによって検索がしやすく、また、情報のおおまかな傾向を示すことで検索の手がかりをつかみやすくすることができ、データベースの活用、検索者支援につながるとの結論であった。

講演の後、言語学・コーパスとデジタル・ヒューマニティーズとの関わりや、TEIについての質問、大学史編纂における公開、今後の展望等の質疑応答があり、有益な情報収集が行えたと感じた。

全体をとおした感想として。大学史資料の収集においては、以前の「現物収蔵」を中心とした収集・整理の段階から、活用を見据えた上での収集・整理、データ化（電子化）が必要となる段階に移行しつつあることが窺えた。大学史資料においては、以前よりテキストマイニング等の利用による文章の傾向を探ることは行われていたが、おおまかな傾向を知るレベルに留まっていたと認識している。TEIによるテキストデータを構造化することにより、検索利便性が上がることはもとより、より高度な分析が可能となり、閲覧者にとって「気付き」「検索しやすい」大学史資料の閲覧が可能になるのではないかと感じた。今後の研究に注視したい。また、本学における大学史資料公開、大学史編纂において大変参考となる講演であったと感じた。

全国大学史資料協議会東日本部会
2021年度総会議事録

日　時　2021 年 5 月 27 日（木）
　　13：30 ～ 14：20

会　場　Zoom によるオンライン開催

〔部会総会の成立〕

＊現会員数と出欠状況

	総 計	出 席	欠 席
機関会員	67	32	12
個人会員	34	5	7
総　　計	101	37	19

＊総会定足数は、機関会員 67、個人会員 34 の総計 101 の過半数。

＊部会規約第 11 条第 5 項に基づき、欠席届を委任状とするため、出席会員数 37 と欠席届提出会員数 19 の合計は 56 となり、部会総会は成立した。

［出席会員］

跡見学園女子大学、お茶の水女子大学、
学習院、神奈川大学、慶應義塾、
國學院大學、淑徳大学、女子美術大学、
聖心女子大学、専修大学、創価大学、
大東文化大学、拓殖大学、玉川大学、
中央大学、帝京大学、東海大学、
東京経済大学、東京農業大学、東邦大学、
東北学院、東北大学、東洋英和女学院、
東洋学園大学、東洋大学、
日本獣医生命科学大学、日本大学、
法政大学、武蔵野美術大学、明治大学、
明星学苑、立教学院、
古俣達郎、林慎一郎、檜皮瑞樹、
藤田茂、古郡信幸

（出席者合計 53 名）

〔配布資料〕

1．総会次第
2．2021 年度総会参加者一覧
3．2020 年度事業報告書
4．2020 年度収支決算書
5．2020 年度貸借対照表
6．2021 年度事業計画書（案）
7．2021 年度収支予算書（案）
8．会員名簿

開会の挨拶　瀬戸口　龍一氏
（会長校・専修大学）

会場校挨拶　髙柳　俊男氏
（法政大学）

議長の選出　例年は議長、副議長を選出しているが、今年度はオンラインでの開催となったため、事務局（明治大学）が進行することとなった。

議　事

1．2020 年度事業報告・同決算報告について
事務局（日本大学）から、配布資料「2020 年度事業報告書」に基づいて昨年度の事業報告があり、次いで会計委員（東海大学）から配布資料「2020 年度収支決算書」に基づいて昨年度の収支決算が報告され、満場一致で承認された。

2．2020 年度監査報告について
監査委員（國學院大學）から決算が適正であった旨の監査報告があり、報告について満場一致で承認された。

3．2021 年度事業計画・同予算案について
事務局（日本大学）から、配布資料「2021 年度事業計画書（案）」に基づいて本年度事業計画案の説明があり、次いで会計委員（東海大学）から配布資料「2021 年度収支予算書（案）」に基づいて本年度予算案が説明され、審議の結果、事業計画・予算案とも原案通り満場一致で承認された。

閉会の挨拶　豊田　雅幸氏
（副会長校・立教学院）

〔概要〕

2021 年度東日本部会総会では、会長校による挨拶に続いて、会場校挨拶がなされた。今年度は Zoom を利用したオンラインでの開催となったことから、議長および副議長の選出は行わず、事務局が進行することとなった。議題については、例年通り前年度 2020 年度の事業報告および決算報告があり、監査報告を含めて各会員に諮られ、支障なく承認された。続いて、2021 年度事業計画案および予算案について説明がなされ、満場一致で承認された。現下の状況では会の活動はオンラインを活用して行うことが予想されることから、オンラインの特性を活かして積極的に東日本部会・西日本部会の研究会の交流を図ること等について意見が出され、今だからこそ出来ることもあるので、意見・提案があれば事務局まで寄せてほしい旨付言があった。

全国大学史資料協議会東日本部会
2020年度収支決算書
2020年4月1日～2021年3月31日

収　入

（単位：円）

項　目	予　算	決　算	増　減	摘　要
会費収入	1,565,000	**1,385,000**	180,000	
法人等会員	1,360,000	**1,360,000**	0	68機関分×20,000円
個人会員	205,000	**25,000**	180,000	滞納分（2名分5口）×5,000円（※2020年度の個人会員年会費は免除）
利息収入	1,000	**43**	957	
預貯金利息	1,000	**43**	957	預金利息
参加費収入	350,000	**0**	350,000	
部会総会参加費	150,000	**0**	150,000	※2020年度は新型コロナ感染対策により書面決議に変更
全国総会参加費	200,000	**0**	200,000	※2020年度は新型コロナ感染対策により開催延期に変更
雑収入	0	**750**	△ 750	
雑収入	0	**750**	△ 750	消耗品購入に伴う現金還元収入
合　計	1,916,000	**1,385,793**	530,207	

支　出

（単位：円）

項　目	予　算	決　算	増　減	摘　要
運営費支出	50,000	**59,173**	△ 9,173	
総会費	20,000	**16,165**	3,835	2019年度総会費の未精算分
幹事会費	10,000	**33,000**	△ 23,000	Zoomアカウント年間契約料
部会研究会費	20,000	**10,008**	9,992	第122回研究会見学入場料（印刷博物館）等
謝礼支出	80,000	**44,548**	35,452	
講師謝礼等	80,000	**44,548**	35,452	講演謝金（2名分）、同源泉所得税
消耗品費支出	10,000	**194**	9,806	
消耗品費	10,000	**194**	9,806	事務用品代等
印刷費支出	400,000	**151,965**	248,035	
印刷費	400,000	**151,965**	248,035	会報№63・№64印刷費
通信費支出	150,000	**168,220**	△ 18,220	
事務連絡費	150,000	**168,220**	△ 18,220	会員連絡費、会報発送費（№63・№64分）、通信物切手料金等
手数料支出	10,000	**5,280**	4,720	
手数料等	10,000	**5,280**	4,720	金融機関送金手数料他
参加費支出	500,000	**0**	500,000	
総会参加費	500,000	**0**	500,000	※2020年度は新型コロナ感染対策により開催しなかったため
旅費交通費	0	**0**	0	
旅費交通費	0	**0**	0	
事業費支出	350,000	**246,200**	103,800	
出版事業	250,000	**208,707**	41,293	研究叢書21号（※西日本分担金84,113円）
その他	0	**0**	0	
ホームページ事業	100,000	**37,493**	62,507	ウェブサイト更新料等（※西日本分担金29,926円）他
ホームページ改善積立金	0	**0**	0	
予備費	50,000	**0**	50,000	
合　計	1,600,000	**675,580**	924,420	

当年度収支差額	316,000	**710,213**	―	
前年度繰越収支差額	4,220,642	**4,220,642**	―	
翌年度繰越収支差額	4,536,642	**4,930,855**	―	

2020年度貸借対照表

2021年3月31日

資　産

（単位：円）

項　目	本年度末	前年度末	増　減	摘　要
ホームページ改善積立金	**600,000**	600,000	0	
三井住友銀行	**600,000**	600,000	0	三井住友銀行　経堂支店普通預金
銀行預金	**4,886,059**	4,132,429	753,630	
三井住友銀行	**4,886,059**	4,132,429	753,630	三井住友銀行　経堂支店普通預金
現金	**44,796**	88,213	△ 43,417	
事務局校	**0**	21,685	△ 21,685	立教学院
会計校	**44,796**	66,528	△ 21,732	東海大学
合　計	**5,530,855**	4,820,642	710,213	

負債・収支差額

（単位：円）

項　目	本年度末	前年度末	増　減	摘　要
負債	**600,000**	600,000	0	
ホームページ改善引当金	**600,000**	600,000	0	
収支差額	**4,930,855**	4,220,642	710,213	
収支差額	**4,930,855**	4,220,642	710,213	
合　計	**5,530,855**	4,820,642	710,213	

2021年　4　月　1　日

上記の通り報告します。

会計委員　東海大学　椿田　卓士　㊞

神奈川大学　齊藤　研也　㊞

神奈川大学　大坪　潤子　㊞

2021年　4　月　14日

監査の結果、適正と認めます。

監査委員　國學院大學　渡邉　卓　㊞

帝京大学　堀越　峰之　㊞

全国大学史資料協議会東日本部会
2021年度収支予算書（案）
2021年4月1日～2022年3月31日

収　入

（単位：円）

項　目	2021年度予算	2020年度予算	増　減	摘　要
会費収入	1,520,000	1,565,000	45,000	
法人会員	1,340,000	1,360,000	20,000	67機関　@20,000円　※2020年度は68機関
個人会員	180,000	205,000	25,000	35名　@5,000円（他、滞納1口分）
利息収入	1,000	1,000	0	
預貯金利息	1,000	1,000	0	銀行利息
参加費収入	60,000	350,000	290,000	
部会総会参加費	0	150,000	150,000	30名　@0円（2021年度は法政大）　※2020年度は書面決議
全国総会参加費	60,000	200,000	140,000	20名　@3,000円（2021年度は関西学院大）　※2020年度は開催延期
雑収入	0	0	0	
雑収入	0	0	0	
合　計	1,581,000	1,916,000	335,000	

支　出

（単位：円）

項　目	2021年度予算	2020年度予算	増　減	摘　要
運営費支出	80,000	50,000	△ 30,000	
総会費	20,000	20,000	0	会場費・設備使用料、非課税交通費他
幹事会費	40,000	10,000	△ 30,000	Zoomライセンス契約料、会場費・設備使用料他
部会研究会費	20,000	20,000	0	会場費・入場料・飲料代他
謝礼支出	80,000	80,000	0	
講師謝礼等	80,000	80,000	0	講演料・原稿料・源泉税・課税交通費他
消耗品費支出	10,000	10,000	0	
消耗品費	10,000	10,000	0	事務消耗品費
印刷費支出	400,000	400,000	0	
印刷費支出	400,000	400,000	0	会報印刷費（№65および№66　年2回分）他
通信費支出	180,000	150,000	△ 30,000	
事務連絡費	180,000	150,000	△ 30,000	会員連絡費、会報送料（№65および№66　年2回分）
手数料支出	10,000	10,000	0	
手数料等	10,000	10,000	0	金融機関振込手数料他
参加費支出	60,000	500,000	440,000	
総会参加費	60,000	500,000	440,000	資料印刷費（5月部会総会、10月全国総会）、その他開催経費
旅費交通費	0	0	0	
旅費交通費	0	0	0	
事業費支出	350,000	350,000	0	
出版事業	250,000	250,000	0	叢書22号印刷費（西日本部会分担金）、その他
その他	0	0	0	
ホームページ事業	100,000	100,000	0	維持管理金
ホームページ改善積立金	0	0	0	ホームページのバージョンアップ・機能追加臨時経費
予備費	50,000	50,000	0	
合　計	1,220,000	1,600,000	380,000	

当年度収支差額	361,000	316,000	―	
前年度繰越収支差額	346,436	30,436	―	
翌年度繰越収支差額	707,436	346,436	―	

講　演

講演１　古俣　達郎氏
（HOSEI ミュージアム所員）
「法政大学における大学史編纂の歩みと HOSEI ミュージアムの開設について」

講演２　北口　由望氏
（HOSEI ミュージアム所員）
「HOSEI ミュージアムの取り組み－大学史展示をデジタルサイネージでみせる－」

〔概要〕

2021 年度東日本部会総会は、新型コロナウイルス感染症の影響により東京都の緊急事態宣言が発令される中、オンラインでの開催となった。記念講演では、まず古俣達郎氏（HOSEI ミュージアム所員）より「法政大学における大学史編纂の歩みと HOSEI ミュージアムの開設について」と題した講演を頂いた。戦前期の周年事業と年史編纂からスタートした同大学の大学史編纂が、1960 年代には実証主義に基づく通史という画期を経て、恒常的な編纂体制を持つまでについて時系列で報告された。それに伴い自校教育の実施や、展示公開を事業として位置付けるなど、HOSEI ミュージアム開設への要因になった様々な出来事が紹介された。

次に、北口由望氏（HOSEI ミュージアム所員）により「HOSEI ミュージアムの取り組み－大学史展示をデジタルサイネージでみせる－」との講演を頂いた。同ミュージアムのメイン展示である「大学史サイネージ」について、導入の経緯や、メリット、デメリットについて報告がなされた。質疑では、大学史編纂やデジタルサイネージについての質疑が闊達に行われ、年間テーマについて理解を深めるための一助となる会であった。

（堀越峰之）

全国大学史資料協議会東日本部会
幹事会議事録

第 196 回東日本部会幹事会議事録

日　時　2021 年 4 月 23 日（金）
14 時 00 分～ 15 時 20 分

会　場　法政大学市ヶ谷キャンパス九段北校舎 2 階 K201 教室
※対面とオンラインのハイブリッド開催

出　席　【対面】
國學院大學　専修大学　帝京大学
東海大学　日本大学　明治大学
立教学院　古俣達郎　檜皮瑞樹
法政大学（総会会場校）
【オンライン】
神奈川大学　淑徳大学
大東文化大学　武蔵野美術大学

議　題

（１）2021 年度東日本部会総会について
・事務局（日本大学）より、当日のスケジュール案と担当者の確認があった。新型コロナウイルスの感染状況によっては、オンラインのみの開催となることも考慮することが確認された。
・事務局より事業報告、事業計画案、会計校（東海大学）より決算書・予算書案について報告があり、一部修正を加え了承された。
・古俣会員より、講演終了後の見学会の流れについて説明があった。なお、見学会はオンラインでも配信する予定のため、幹事会終了後、HOSEI

ミュージアムで電波状況の確認とZoom配信の内容等について打ち合わせを実施した。

（2）2021年度研究会について

・事務局より本年度の研究会担当について、幹事校分担表をもとに確認があった。

・檜皮会員より、7月研究会は7月16日（金）、千葉大学で開催することが提案され、了承された。内容はデジタル・ヒューマニティーズ（人文情報学）に関するもので、アジアユーラシア・グローバルリーダー養成のための臨床人文学教育プログラムについての紹介とのこと。

（3）2021年度全国研究会について

・西日本部会庶務校より、本年度の全国研究会は東日本部会から報告者を2名出すように依頼があった。事務局から、明治大学博物館で開催された4大学共催展「神田発信！大学スポーツの軌跡」を報告のひとつとする旨が提案され、了承された。もう1名の報告については、事務局と会長校が相談の上、5月中に決定することとなった。

（4）その他

・編集担当の大東文化大学より、会報の発行について報告があった。

・事務局より、大学史資料所蔵機関紹介ページの更新について4月22日までに29件（東日本部会17件、西日本部会12件）の修正依頼があったことが報告された。また、更新費用の見積もりについて事務局より報告があり、了承された。

・西日本部会第1回のオンライン研究会（5月28日開催）について、東日本部会会員への周知依頼が西日本部会庶務校からあった旨が事務局より報告され、了承された。

※後日、メールによる持ち回り審議で以下の件が承認された。

・事務局より、アート・ドキュメンテーション学会（JADS）から、オンライン開催される年次大会についての後援依頼があった旨報告があり、了承された。

・会計校（東海大学）より、①2020年度決算報告の一部修正、②昨年度緊急避難的措置として実施した個人会員年会費の免除について、本年度は例年通り徴収、③年会費請求書はすべて総会後に郵送の3件について提案があり、了承された。

以　上

第197回東日本部会幹事会議事

日　時　2021年5月27日（木）
12時30分～13時00分

場　所　Zoomによるオンライン会議

出　席　神奈川大学　國學院大學　淑徳大学
専修大学　大東文化大学　帝京大学
東海大学　日本大学
武蔵野美術大学　明治大学
立教学院　古俣達郎　檜皮瑞樹

議　題

（1）2021年度東日本部会総会について

・事務局（日本大学）より、当日のスケジュールと担当者の確認があった。緊急事態宣言の再発出に伴いオンラインのみの開催となったため、進行についてあらためて確認がなされた。

（2）2021 年度研究会について

・事務局より、本年度の研究会について確認された。次回 7 月研究会担当の檜皮氏より、千葉大学西千葉キャンパスでハイブリッド形式にて開催予定で、開催時刻は後日決定する旨が報告された。

（3）2021 年度全国研究会について

・事務局より、全国研究会の開催方法等については、6 月 8 日の西日本部会幹事会での決定待ちであることが伝えられた。

・事務局より、全国研究会での東日本部会の報告者については、日本体育大学宮原氏、中央大学中川氏に依頼する旨の提案があり、了承された。

（4）その他

・事務局より、大学史資料所蔵機関紹介ページの更新について、現在最終校正中で 5 月末日には新ページに更新できると報告があった。

以　上

第 198 回東日本部会幹事会議事録

日　時　2021 年 7 月 16 日（金）
13 時 30 分～ 14 時 00 分

場　所　千葉大学西千葉キャンパス
法政経学部棟法政経第 1 会議室
※対面及び Zoom によるハイブリッド形式

出　席　【対面】
國學院大學　専修大学　東海大学
日本大学　明治大学　古俣達郎
檜皮瑞樹
【オンライン】
神奈川大学　淑徳大学
大東文化大学　帝京大学
武蔵野美術大学　立教学院

議　題

（1）2021 年度東日本部会総会総括

・事務局（日本大学）より、東日本部会総会の総括があった。ハイブリッドやオンライン形式での開催については、今後もより良い開催方法を検討していくことが確認された。

（2）2021 年度研究会について

・事務局より、研究会担当及び記録担当について確認がなされた。

・本日の研究会について、研究会担当の檜皮氏よりタイムスケジュール等の最終確認があった。

・12 月研究会について、研究会担当の専修大学瀬戸口氏より、慶應義塾史展示館の見学会を開催したい旨の提案があり、了承された。

（3）2021 年度全国研究会について

・事務局より、全国研究会についてのタイムスケジュール等が確認された。

・東日本部会が担当である 2022 年度全国研究会会場校について検討された。いくつかの候補が挙げられたが、次回、幹事会で決定することとなった。

（4）その他

・事務局より、インターネット資料収集保存事業の一環として国立国会図書館関西館より当協議会ホームページの情報を保存したいとの依頼があった旨が報告され、了承された。

・事務局より、大学史資料所蔵機関紹介について、5 月 28 日に最新の情報に更新された旨の報告があった。

以　上

全国大学史資料協議会東日本部会
研究会記録

第 122 回東日本部会研究会記録
日　時　2021 年 3 月 11 日（木）
　　14 時 00 分～ 16 時 00 分
会　場　印刷博物館研修室
　　（東京都文京区水道 1-3-3
　　トッパン小石川ビル B1 階）
　※対面とオンラインのハイブリッド開催
出　席　【対面】
　　青山学院　神奈川大学　専修大学
　　帝京大学　東海大学　東京経済大学
　　日本大学　法政大学　明治大学
　　立教学院　早稲田大学　古俣達郎
　　齊藤浩次　林慎一郎　檜皮瑞樹
　　松田栄作
　　【オンライン】
　　お茶の水女子大学　國學院大學
　　淑徳大学　女子美術大学
　　聖心女子大学　大東文化大学
　　中央大学　東京農業大学
　　東邦大学　武蔵野美術大学
　　阿部伊作
　　（計 35 名）
会長校挨拶　瀬戸口龍一氏
　　（専修大学大学史資料室）
報　告
　①「くずし字 OCR とふみのはゼミ」
　　（凸版印刷　福井尚子氏）
　②「「IMAGE WORKS」を活用した資料の整理と共有について」
　　（凸版印刷　立木玲央氏）
　③「印刷博物館の設立とリニューアル」
　　（印刷博物館　宗村泉氏）
質疑討論　報告終了後会場参加者・オンライン参加者により実施
見　学　印刷博物館

〔概要〕
凸版印刷「印刷博物館」を会場として「企業における史資料アーカイブの取り組み（発掘・共有・公開など）の現状について」をテーマに、3 つの事例報告と見学会が行われた。

報告 1 の福井氏は「凸版印刷のくずし字に関する取り組み」と題し、同社が力を入れる古文書読み込み及びくずし字解読システムである「ふみのは」サービスの概要と仕組み、活用方法について解説された。報告 2 の立木氏は「クラウド型ファイル管理・共有サービス『IMAGE WORKS』のご紹介」と題し、デジタルデータの管理共有活用方法の効率化と新たな取り組みについて説明された。報告 3 の宗村氏は「印刷博物館の設立とリニューアル」と題し、同館の概要やリニューアル時の概念と同社の方針などについて報告された。3 名の報告を受けて質疑応答、意見交換を行った後、開設 20 周年記念としてリニューアルされた「印刷博物館」を見学、散会となった。

なお、今回の研究会は Zoom によるオンライン参加と現地に参集しての対面参加とのハイブリッド方式を用いた初めての試みであった。通信状況もほぼ問題なく、双方向で見学会まで滞りなく進行することができた。

（浅沼薫奈）

第 123 回東日本部会研究会記録
日　時　2021 年 7 月 16 日（金）
　　14 時 30 分～ 16 時 00 分
会　場　千葉大学西千葉キャンパス
　　法政経学部棟（文・法 2 号棟）
　　法政経第 1 会議室
　※対面とオンラインのハイブリッド開催

出　席　【対面】
國學院大學　専修大学　東海大学
日本大学　明治大学　古俣達郎
林慎一郎　檜皮瑞樹
【オンライン】
青山学院　お茶の水女子大学
神奈川大学　上智大学
女子美術大学　大東文化大学
玉川大学　中央大学　帝京大学
東京農業大学　東洋大学　法政大学
武蔵野美術大学　明星学苑
立教学院　亀谷篤志
（計 33 名）

会長校挨拶　瀬戸口龍一氏
（専修大学大学史資料室）

講　演　「情報の構造化によるデータベースの検索利便性の向上」
（千葉大学人文社会科学系
教育研究機構　小風尚樹氏）

質疑討論　報告終了後会場参加者・オンライン参加者により実施

〔概要〕

標記の研究会が、会場及び Zoom によるオンライン参加のハイブリッド方式にて開催された。小風氏による講演は、デジタル資料における「テキストマイニング」技術を駆使した人文科学の研究やその成果について、「デジタル・ヒューマニティーズ」（DH）の視点からテキストデータベース構築の可能性について展望を述べたものであった。デジタル資料を単なる文字情報に留めることなく、含有する様々な情報をタグ付けし構造化することで、デジタルアーカイブの理解や検索利便性の向上が可能になる、という点について、国内外のアーカイブ事例の紹介を交えながら、DH 理論の観点に基づく具体的な報告がなされた。講演に続いての質疑応答では、DH 理論と従来の言語学分野との関連性や、講演内で紹介された「渋沢ダイアリー」構築の具体的な作業過程、実際のタグ付け実践における留意点、さらに大学史編纂との関連性等、会員間で活発な質疑が交わされた。

（椿田卓士）

ご案内

全国大学史資料協議会および同協議会東日本部会に関するお問い合わせ、入会申し込みは、下記へご連絡ください。

【日本大学企画広報部広報課（大学史）】
〒102-8275
東京都千代田区九段南4-8-24
TEL：03（5275）8444
MAIL：nuhistory@nihon-u.ac.jp

【明治大学史資料センター】
〒101-8301
東京都千代田区神田駿河台1-1
TEL：03（3296）4085
MAIL：hismate@meiji.ac.jp

会報編集

【大東文化大学　大東文化歴史資料館】
〒175-0083
東京都板橋区徳丸2-19-10
大東文化大学徳丸研究棟
TEL：03（5399）7646